

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

1. 機関の代表者 (学 長)	(大学名)	九 州 大 学	機関番号	1 7 1 0 2
	(ふりがな<ローマ字>) (氏 名)	Kajiyama Tisato 梶 山 千 里		

2. 大学の将来構想

九州大学は、21世紀初頭を睨んで、ゲノム、ナノ、ITなど革新的な研究のさらなる発展を期した改革に着手してきた。すなわち、平成3年に新キャンパス移転構想、ついで平成4年には大学改革の基本構想を定め、自律的に改革を進めてきた。知の探求と創造、創造的人材の育成、知と人材の社会還元からなる理念は、平成12年の九州大学教育憲章、平成13年の九州大学学術憲章に掲げられたところである。ここにあって、組織の改編は学府・研究院制度の導入により専門領域統合型の教学組織の形成と、時代に合わせた随意随時の改編を保障する可塑性をも確保した。これらの改革の成果をより確実にする駆動力として21世紀COEプログラムが機能する。

九州大学が志向する研究教育は、世界最高水準を維持し、これをさらに発展させるため、(1)実績に基づく新科学領域への展開と、(2)歴史的・地理的な必然が導くアジア指向を目標に掲げ、自己実現することに特徴がある。さらに、学問領域によって社会ニーズを特化し、研究教育拠点を形成して研究の高度化・先端化を促しつつ、併せて新専攻の形成により人材育成に資することをもって大学の将来構想とする。

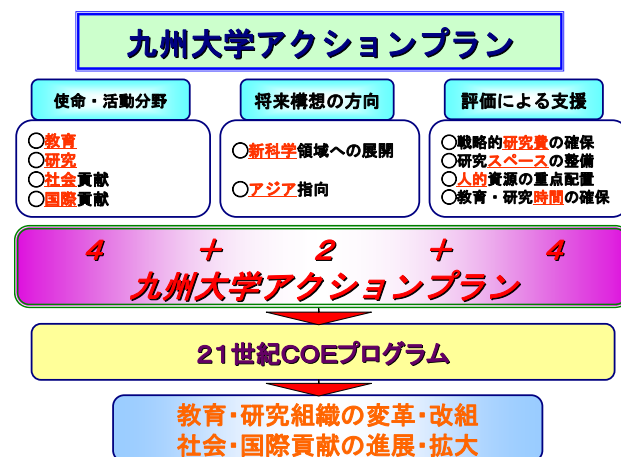
新科学領域への展開を期すために、これまでの実績を起爆剤として、化学・材料科学分野においては分子情報科学の機能イノベーションを、情報・電気・電子分野においては情報・通信基盤技術や電気・電子システムの技術開発の更なる発展を、生命科学分野においては新たな応用生命科学領域を世界に発信することを目指して研究教育拠点を形成し、21世紀を先導する成果を確実にするとともに、若手研究者の独創的活動に峻烈な動機付けを行い、世界有為の人材育成を目指す。

一方、アジア指向型の研究教育については、人文科学における東アジアと日本を研究テーマにする研究教育拠点を形成する。このように世界展開とともにアジア研究活動を重点的に展開してきた九州大学は、人類文化のなかで日本とアジアを包含し、共有する問題の抽出とその解決を探るべく、アジア総合政策センター、韓国研究センター及びアジアの拠点大学間でネットワークポイントを設置し、研究の高度化、普遍化とともに

にアジア圏で活躍する人材養成を推進している。

総長を中心としたマネジメント体制としては、リーダーシップを担保する運営体制とするため、平成14年度に、総長、副学長、総長特別補佐及び幹部事務官による執行部会議を編成、平成16年度の法人化後からは、総長、理事及び監事による拡大役員会を編成し、これを学内行政の最高機関とした。

また、総長を中心としたマネジメント体制の下、「研究」、「教育」、「社会貢献」、「国際貢献」の4つのビジョンを立て、本学の将来構想である「新科学領域への展開」、「アジア指向」を達成するために、「戦略的研究費の確保」、「研究スペースの整備」、「人的資源の重点配置」、「教育・研究時間の確保」の4つの支援を行う。これを「4-2-4九州大学アクションプラン」として掲げ、世界的な研究教育拠点を形成する。



ハード面では、新キャンパスへの移転の着実な実行、地域連携のもと九州大学学術研究都市を創出する。施設面では競争的研究環境の強化にむけて研究スペースを整備する。

ソフト面の第一は、組織の改編で、教学の研究教育組織としての学府・研究院制度が平成12年度に完成した。今後は、「学府・研究院・学部企画調整協議会」により5年毎の点検・評価を実施し、必要な改編を担保している。

ソフト面の第二は、総長を機構長とする以下の各種

機構を運用することである。

研究戦略として、「高等研究機構」を設置し、研究の全般に亘って機能を強化するとともに、学内学際的研究拠点としてリサーチコアの認定や教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトの強化により活動を展開する。また、総長裁量による重点的な事業遂行に充当するための戦略的研究教育推進経費の確保や戦略的教員人員のプールバンク制度を実行している。

教育戦略として、「全学教育機構（平成18年度からは高等教育機構）」を設置し、例えば、専門的知識・技能を備えたゼネラリストを育成する 21 世紀プログラム、Challenge & Creation、九州大学／ロバート・ファン／アントレプレナーシッププログラムにより学士・大学院課程学生の自主的能動的学習能力を涵養するなど、特色ある教育を実施している。また、修士・博士課程においては、複数指導教員体制のもと、能動的なカリキュラムの選択幅の充実、さらに、学府・研究院制度の特徴を活用して、時代の要求に応じた専攻及び専門職大学院を配置して将来の発展を期す。

社会連携戦略として、「産学連携推進機構」を設置し、社会連携事業の窓口を一つにした。さらに、知的財産戦略及び産学連携組織の一層の機能強化を目指して、「知的財産本部」を設置した。また、産学連携の新しい展開として、「包括型産学連携」と「国際産学連携」を推進している。

さらに国際交流戦略として、九州大学はアジアとの歴史的・地理的交流実績を基本構想に加え、アジア学長会議を創設、アジア大学ネットワークポイントの設置や九州大学海外オフィスの設置、アジアの有力大学との学生交流プログラムの実施などの活動を展開している。学内的にも「国際交流推進機構」を設置して、このなかでアジア総合政策センター、韓国研究センター、留学生センター、国際交流推進室が活動しており、アジアを中心とした国際交流の深化も目指す。

3. 達成状況及び今後の展望

九州大学では、平成14年度、平成15年度に採択された「21世紀COEプログラム」9拠点を「4－2－4九州大学アクションプラン」の具体のアクションの中心に据え、組織改編の駆動力とし、これを実現するために総長のリーダーシップの下、トップダウン型で以下の事項について重点的な学内支援を実施し、研究教育拠点の形成を推進した。

ハード面では、新キャンパス移転と九州大学学術研

究都市の創出、病院地区における競争的研究環境強化のためのコラボステーションの設置や新病院の建設などを推進した。

ソフト面では、九州大学が近年、全部局俯瞰型の機能拡充として整備を完了した「高等研究機構」、「高等教育機構」、「産学連携推進機構」、「国際交流推進機構」など総長を長とする種々の「機構」を起動し、目的に合わせて重心を移しながら拠点形成に向けた活動を行った。その具体的な活動としては、「5年目評価、10年以内組織見直し」制度を基に研究教育組織の改編を進める一方で、「水素利用技術研究センター」等の21世紀COEプログラムにおける各研究教育拠点の設置を進めた。また、総長裁量経費により、「未来化学創造センター」、「システムLSI研究センター」等の戦略的教育研究拠点となる5つのセンターを平成17年度に設置した。さらに、研究戦略企画室及び学内評価委員会を設置して拠点形成を促進するための継続的な活動評価を実施し、21世紀COEプログラム拠点リーダーを始めとする優秀な人材に対し「研究スーパースター支援プログラム」を創設した。これにより、戦略的研究費の確保、人的資源の措置、研究者の研究時間の確保を図り、全学的に拠点形成を推進した。さらに、「21世紀COEプログラム支援室」を設置し、学内支援体制を強化した。

平成14年度に採択された4拠点の今後の展望としては、当該拠点の研究教育を発展・拡充させるために設置したポストゲノム研究センター、未来化学創造センター、システムLSI研究センターや、人文科学学府及び比較社会文化学府に新たに設置した歴史学拠点コースを中心に、当該拠点が事業期間中に世界有数の研究教育拠点として実施した若手研究者の育成、研究活動を継続する。また、国内外の研究機関との共同研究や外部資金の獲得により、21世紀COEプログラムの成果を更に発展させる。

大学としても「4－2－4九州大学アクションプラン」に基づき、研究教育活動に対し、継続して21世紀COEプログラムと同様な支援を実施する。

さらに、総長を機構長とする「高等研究機構」、「高等教育機構」、「産学連携推進機構」、「国際交流推進機構」を運用し、世界的な研究教育拠点形成を継続的に推進する。

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	九州大学	学長名	梶山千里	拠点番号	D 1 3			
1. 申請分野	A<生命科学> B<化学・材料科学> C<情報・電気・電子> D<人文科学> E<学際・複合・新領域>							
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	東アジアと日本：交流と変容－アイデンティティ形成の比較社会史的研究－ (East Asia and Japan: Interaction and Transformations) ※副題を添えている場合は、記入して下さい(和文のみ)							
研究分野及びキーワード	<研究分野: 史学>(比較歴史学)(日本史)(朝鮮史)(中国史)(考古学)							
3. 専攻等名	比較社会文化学府日本社会文化専攻、比較社会文化学府国際社会文化専攻、人文科学府歴史空間論専攻、人文科学府言語・文学専攻							
4. 事業推進担当者	計 18 名							
ふりがなくローマ字) 氏 名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)					
(拠点リーダー) Imanishi Yuichiro 今西裕一郎	人文科学研究院・教授	日本古代文学史 博士(文学)	研究・教育全体の総括					
Tanaka Yoshiyuki 田中 良之	比較社会文化研究院・教授	考古人類学 博士(文学)						
Kawanoto Yoshiaki 川本 芳昭	人文科学研究院・教授	東アジア古代中世史 博士(文学)	研究・教育全体の統括補佐 東アジア諸国家とその形成過程の比較研究 東アジア諸国家とその形成過程の比較研究、 サブテーマ統括					
Miyamoto Kazuo 宮本 一夫	人文科学研究院・教授	東アジア考古学 博士(文学)						
Mizoguchi Koji 溝口 孝司	比較社会文化研究院・助教授	日本考古学 Ph. D	東アジア諸国家とその形成過程の 比較研究					
Hamada Kosaku 濱田 耕策	人文科学研究院・教授	朝鮮史 博士(史学)						
Sakaue Yasutoshi 坂上 康俊	人文科学研究院・教授	日本古代史 文学修士	内陸圏・海域圏交流ネットワークと イスラム研究、サブテーマ統括					
Morikawa Tetsuo 森川 哲雄	比較社会文化研究院・教授	北アジア史 博士(文学)						
Shimizu Kosuke 清水 宏祐	人文科学研究院・教授	イスラム文明史 文学修士	内陸圏・海域圏交流ネットワークと イスラム研究 (平成17年4月1日追加)					
Hattori Hideo 服部 英雄	比較社会文化研究院・教授	日本中近世史 博士(文学)						
Saeki Koji 佐伯 弘次	人文科学研究院・教授	日本中世史 文学修士	内陸圏・海域圏交流ネットワークと イスラム研究 (平成17年4月1日追加)					
Nakano Hitoshi 中野 等	比較社会文化研究院・教授	日本近世史 博士(文学)						
Funada Yoshiyuki 船田 善之	人文科学研究院・講師	中国内陸圏交流史 博士(文学)	東アジア社会の基層研究 (平成17年1月24日辞退)					
Yokkaichi Yasuhiro 四日市康博	人文科学研究院・講師	中国海域圏交流史 博士(文学)						
Nakahashi Takahiro 中橋 孝博	比較社会文化研究院・教授	自然人類学 医学博士	交流と変容の研究 (平成17年1月24日辞退)					
Sakono Fuminori 迫野 虔徳	人文科学研究院・教授	日本語史・文献方言史 文学博士						
Yoshida Masahiko 吉田 昌彦	比較社会文化研究院・教授	日本近世史 博士(史学)	比較社会史の研究 (平成17年1月24日辞退)					
Arima MANABU 有馬 學	比較社会文化研究院・教授	日本近代史 文学修士						
比較社会史の研究 (平成17年1月24日辞退)								
5. 交付経費(単位:千円) 千円未満は切り捨てる () : 間接経費								
年 度(平成)	1 4	1 5	1 6	1 7	1 8	合 計		
交付金額(千円)	79,000	92,000	79,400	24,000 (2,400)	22,670 (2,267)	297,070		

6. 拠点形成の目的

本拠点は「歴史的・地理的必然が導くアジア指向」という、九州大学の将来構想の一翼を担う研究教育拠点であり、その位置づけを踏まえて、「交流と変容」の歴史的研究に基づく東アジア諸地域のアイデンティティの形成過程の解明を目指すところに特色がある。その実現のために、アジア諸地域に至近であるという地の利を生かしてアカデミック・ハブを構築し、それを通じて今日なお混迷する「東アジア／日本」関係の究明を目的とする世界的研究教育拠点の形成を目指す。

当初計画の3ユニットを大幅に改編し、「比較社会史研究」の2サブテーマ（「東アジア諸国家とその形成過程の比較研究」「内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム」）へと絞り込むとともに、アジアイスラム分野を視野に入れ、地域横断的・広域的アプローチを強化することによって、東アジア諸地域のアイデンティティ形成と変容過程の解明を目指し、上記の研究を、日本史、東洋史、朝鮮史、イスラム学、考古学の諸分野の連携によって実施する。

「東アジア／日本」社会のアイデンティティを固定的に捉えるのではなく、その形成過程を歴史的・動的に捉えることによって、変動する現代に対応する柔軟なアジア認識の獲得を目指す点、特に、アジアイスラム視点の導入による、脱領域的なアジア史研究は他に類を見ない。

日本のアイデンティティ研究を目指す組織としては、国際日本文化研究センターがあるが、「東アジア／日本」の「交流と変容」に視座を絞った東アジア／日本のアイデンティティ形成研究は本プログラム独自のものである。

事業終了後は、改編した学府の「COE専攻」として研究教育を行い、「東アジア史研究コンソーシアム」を継続発展させて、「東アジア／日本」研究における日本・アジア・世界の研究者のアカデミック・ハブ／世界的研究教育拠点としての役割を担う。

研究面においては、東アジア諸地域のアイデンティティ形成・変容・複合の歴史的過程を、近年の中国とアジアイスラム圏の伸張と相剋までを含めて明らかにし、その過程で形成した共同研究ネットワークによる国際的東アジア

研究のハブとしての研究拠点を実現する。

教育面においては、2サブテーマに即した教育に基づき、アジア諸地域のアイデンティティ成立の歴史に通じ研究対象地域言語および英語によるコミュニケーション・スキルと論文執筆能力を有する「アジア専門人」を輩出する。

東アジア諸地域のアイデンティティの形成・複合過程は、中国世界システムの拡張・構造変動と密接に関連し、アジアにおけるイスラムは領域横断的に拡張しているが、従来この分野での研究は個別的であり、イスラムの視座も不十分であった。本プログラムはこのような過程を総体的に捉え、今日の複合的アイデンティティのあり方を歴史的観点から位置づける。それによって養成される「アジア専門人」は、アジアの今日的課題にも柔軟に対応できることから、その意義は大きい。

7. 研究実施計画

【拠点形成の課題と解決策】

拠点形成を実現するにあたっての課題は、①拠点形成計画や研究計画の適切かつ着実な進行、②本プログラムの趣旨にあった経費申請、③計画の絞り込みによる時代の限定、④これまでの研究で成果があった部分の継続性、⑤成果の発信、⑥若手研究者の育成である。

①は、学長のリーダーシップのもと、進捗状況を毎月研究戦略委員会に報告し、かつ外部委員を入れた「学内評価委員会」を開催して、着実に推進する。②は、本プログラムの趣旨にあった申請を行うとともに、予算執行体制を見直し、適正に執行する。③は、時代を前近代に限定する。④は、日琉交流史、「故漂」研究等については研究を継続し、進展させる。⑤は、研究紀要を充実させるとともに、ホームページの充実や国際ワークショップの成果出版等により、研究成果を多面的に発信する。⑥は、合同ゼミ・研究会を充実するとともに、COE研究員の採用や新たに若手研究者支援経費等による支援により、若手研究者の育成を図る。

【調査・研究】

〔第1サブテーマ「東アジア諸国家とその形成過程の研究」〕

①調査・研究／国際共同調査・研究の継続：中国・朝鮮・日本の古代国家形成過程に関して、教員と大学院生による、国内、中国、韓国のフィールド調査・資料調査や海外研究機関との共同調査・研究を行い、研究の進展を図る。

②領域横断的研究会の開催

③国際ワークショップの開催

④COE研究員の採用

〔第2サブテーマ「内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム」〕

①調査・研究／国際共同調査・研究の継続：日本、朝鮮、中国、琉球、東南アジアの各地域を隔て、また結びつける中近世の内陸圏・海域圏とこれらを横断するイスラム圏という3つの位相の動態分析をキーとして、比較社会史的研究を行う。そのために、教員と大学院生による、国内、中国、韓国のフィールド調査、資料調査や海外研究機関との共同調

査・研究を行い、研究の進展を図る。

②領域横断的研究会の開催

③国際ワークショップの開催

④COE研究員の採用

【「交流と変容研究会」の開催】

①この研究会では、メンバー全員で本プログラムの統一テーマである東アジアと日本における「交流と変容」を、国家、民族、地域社会のアイデンティティ形成等に関して発表・議論を行い、時空をこえた比較研究を行う。

②その成果を基礎として、最終年度に「総括シンポジウム」を開催して、本プログラムを総括する。

【研究成果の公表と情報発信】

①英文・和文紀要の刊行（各年1号）

②ニューズレターの刊行

③国際ワークショップ記録集刊行

④成果発信のためのホームページの充実

⑤公開講演会の開催

⑥プログラム成果報告書の刊行（最終年度）

【拠点形成】

①新専攻の設置：比較社会文化学府と人文科学府の2つの大学院教育組織を統合・再編し、その中にCOE専攻である「東アジア・日本専攻」を新設し、拠点形成の受け皿とする。

②「東アジア史研究コンソーシアム」の立ち上げ：平成16年度までに共同研究・調査を行ってきた海外諸大学・機関と「東アジア史研究コンソーシアム」を立ち上げ、共同研究と相互の共同教育を行い、学術的連携をさらに強化する。若手研究者の招聘と派遣、院生の派遣を通じて研究の緊密な連携と促進を図る。

③世界的研究拠点の形成

「東アジア史研究コンソーシアム」を推進させ、アジアにもっとも近い九州大学の地の利を生かし、日本・アジア・世界の研究者のアカデミック・ハブとして役割を担う東アジア史研究の世界的研究拠点を形成する。

8. 教育実施計画

拠点形成・新専攻立ち上げに向けての、2 部局の壁を取り払った有機的教育組織の形成や、プログラムの達成目標と有機的にリンクした、大学院生による優れた研究を積極的に補助し、教育環境の整備と効率化を図ること、また、地の利を生かして海外アジア研究者とのアカデミックな交流を日常化することは、拠点形成に向けて必須の事項である。このような観点から、本プログラムでは以下のことを行う。

- ①絞り込んだ2 サブテーマを枠組みとして、領域横断合同ゼミ「東アジア諸地域の国家形成」、「内陸圏・海域圏交流ネットワーク」を開設し、拠点形成に向けての教育組織作りの中核とする。
- ②平成17 年度に立ち上げる「東アジア史研究コンソーシアム」により、プログラム構成員でカバーできない東アジア研究領域に関する教育を可能とするだけでなく、すぐれた海外研究者とのゼミ等を通じて東アジア各地の研究伝統に触れさせる。東アジア史研究コンソーシアムは、東アジア諸地域のアイデンティティ形成と変容過程の解明、さらにはそれを通しての＜東アジア／日本＞の新たなアイデンティティ形成を目指したアカデミック・ハブとしての世界的研究教育拠点形成のため、関連分野で優れた研究教育を行い成果をあげている中・韓を中心とする大学・研究機関と協力し、共同研究・調査、相互訪問によるワークショップ・集中講義の共催、若手研究者・大学院生の派遣と受け入れ等を通じての人的・知的資源の共有・効率的相互育成を図るものである。また、コンソーシアム・パートナー校から訪問した研究者等による研究対象地域言語および英語による講義・ゼミによって、コミュニケーション・スキルについてもトレーニングを行わせることにより、拠点形成に向けての教育のインフラを強力に整備するとともに、教育効果を飛躍的に高める。加えて、相互訪問校において、それぞれ大学院生によるコンソーシアム若手ワークショップを開催させ、コミュニケー

ション・スキルの涵養ならびにアカデミック・ネットワークの形成を効率的に達成する。

- ③同時に、若手研究者支援経費により、海外現地調査を含む院生の研究活動の支援を行い、リサーチ・スキルの養成を行うとともに、「東アジア史研究コンソーシアム」と併せて、大学院生のアカデミック・ネットワーク形成促進の機能を相乗的に高める。
- ④上記③をインセンティブとして、国際学会での研究発表、研究対象地域言語および英語での論文執筆を奨励することにより、さらなるコミュニケーション・スキルの養成、プレゼンテーション・スキルの養成を行う。
- ⑤絞り込んだ2 サブテーマを基盤として、専門性の高い国際ワークショップ「古代国家とアイデンティティ：東アジアモデルの可能性」、「アジア内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム」を17 年度に行い、この運営とアカデミック・ディベートに大学院生を主体的に参画させることにより、大学院生の研究活動一般を飛躍的に活性化する。

教員と大学院生の共同調査等に、上記の諸点を加えることにより、現代東アジア諸地域の文化行動・社会行動・政治行動の言説知・暗黙知的基盤の理解へとつなげる。そして、このプロセスを通じて今日のアジア世界に求められる社会貢献力を持つ「アジア専門人」養成・輩出の教育体制を具体化する。

9. 研究教育拠点形成活動実績

①目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

二つのサブテーマにおける共同研究において、1) 国家形成史において中国と日本の間に相性があることを解明し、東アジアにおける親族集団の変容と国家形成の相似と特性を「東アジアモデル」として提唱するという大きな成果を挙げ、2) アジアの内陸圏・海域圏交流におけるイスラム的要素の解明についても従来具体的に実証されることの無かったモンゴル時代の交流ネットワークにおいてイスラムが果たした役割を多面的に解明した。3) さらに前近代東アジア世界における海域交流については、交流の多層性という観点にたち、領域と脱領域の両面から解明した。

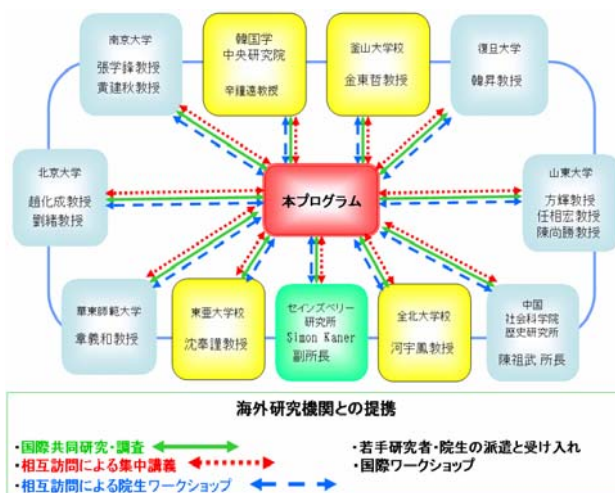
また、本プログラム開始後の国際共同研究を通じたネットワークを基礎として「東アジア史研究コンソーシアム」を構築し、研究教育に活用した。これらに基づく教育に関する成果として、研究対象地域の言語と英語とを習得しアカデミック・スキルを体得した「アジア専門人」たるにふさわしい人材の育成を行い、大学院生の国際学会での発表等が飛躍的に増加した。これらの成果は中間評価における厳しい判定を受けて十分な反省の元に、事業推進担当者が一丸となって拠点形成に取り組んだ結果であり、「目的はある程度達成した」と考える。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

本プログラムにおける教育の目標は、国内・海外でのフィールド調査や資料調査を行うリサーチ・スキルを有し、海外での共同調査・研究を遂行、国際学会での報告を行いうるコミュニケーション・スキル、プレゼンテーション・スキルの習得を前提として、東アジアをはじめとする現代諸地域の文化的基盤を理解し、今日のアジア社会に必要な社会貢献力を持つ「アジア専門人」の養成であった。本プログラムでは5年間で、大学院生延べ204名による99件の海外調査を実施し、部局をまたいだ領域横断ゼミや論文指導の実施によって大学院生・若手研究者

は個々のスキルを習得してきた。その結果、国外で行われた国際学会での英語・研究対象地域言語によるプレゼンテーションもプログラム開始前5年間5件からプログラム開始以降50件と激増し、論文数も同じく98本（うち外国語14本）から183本（うち外国語19本）と増加した。また、大学院生・若手研究者から25名が博士の学位を取得した。

これらによって養成された人材は、本プログラムにおける調査研究において大きな貢献をなしたが、そのみならず、拠点形成の特色をなす「東アジア史研究コンソーシアム」においては、29名の大学院生・若手研究者が英語・研究対象地域言語によるプレゼンテーションを行い、かつ企画運営にも積極的に関与して、本プログラムを東アジアにおける歴史研究のアカデミック・ハブとして構築していくことに大きく貢献した。



3) 研究活動面での新たな分野の創成と、学術的知見等

本プログラムでは「東アジア諸国家とその形成過程の比較研究」「内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム」という二つのサブテーマのもと、事業推進担当者個々と大学院生が東アジア各地域の考古学・歴史学分野において調査研究を推進し、国際的な学術活動を展開した。それによる個別の成果は学術論文・著書、国内・国際学会において発表されてきた。しかし、それだけでなく、本プログラムの事業として東アジア各地域間の「文化交流」と「アイデンティティの形成・変容」を進展させる過程で、そ

それぞれの分野・方法の有機的な連携を進め、「東アジア史学」としての総合を行った。

すなわちサブテーマごとに領域横断研究会を開催して成果を共有し、両サブテーマ合同による「交流と変容」研究会を開催して総括へと向けた検討を行った。そして、暫定的な総括を行うため国際ワークショップ「古代国家とアイデンティティ：東アジアモデルの可能性」（17年6月）、「内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム」（17年9月）、「古代東アジアにおけるアイデンティティの形成と展開」（18年7月）、「新たな東アジア像を求めて—九州と海域世界—」（18年9月）を開催して議論を深化させ、1）国家形成史において中国と日本の間に相同性があることを解明し、東アジアにおける親族集団の変容と国家形成の相似と特性を「東アジアモデル」として提唱するという大きな成果を挙げ、2）アジアの内陸圏・海域圏交流におけるイスラム的要素の解明についても従来具体的に実証されることの無かったモンゴル時代の交流ネットワークにおいてイスラムが果たした役割を多面的に解明し、3）さらに前近代東アジア世界における海域交流については、交流の多層性という観点にたち、領域と脱領域の両面から解明するという成果を得た。

さらに、これらを含めた本プログラムの成果を融合し、新たな展開を模索する場として統括ワークショップ「東アジアと日本：交流と変容」（18年11月）を実施し、東アジアの諸社会間の交流を通じた社会・文化の変容過程とその影響について学際的に解明し、文化変容のパターン化に成功した。そして、東アジアが常に固定的なものではなく、交流と変容のなかで、多様な文化・社会・制度的特性が流動・混交・転変する「動的平衡」の世界ではないか、との認識に達した。

これらは、考古学、文献史学諸分野の方法と資料への理解を前提として、それらを融合させたアプローチであり、新たな東アジア史研究の方法へと踏み込んだものである。

4) 事業推進担当者相互の有機的な連携

研究においては、「交流と変容におけるアイデンティティ形成」という統一テーマのもとに

研究を遂行するという意識を徹底するため、事業推進担当者全員による「交流と変容研究会」を開催し、本拠点の趣旨の事業推進担当者への徹底を行った。教育においては、サブテーマごとにそれぞれ合同ゼミおよび領域横断ゼミを行い、また、国際ワークショップを開催して、サブテーマ内での研究教育両面での事業推進担当者間の有機的な連携を強化した。

運営にあたっては、事業推進担当者間の実務的な連携を密にするために、拠点リーダー、サブリーダーのもとに、拠点全体の経理、書記担当者を配置し、2つのサブテーマにはそれぞれサブテーマリーダー、企画運営担当、広報担当を置いてサブテーマ担当者間の密接な連携と両サブテーマ間の連携的な運営を行うこととした。またホームページとメーリングリストの担当者を置き、情報の即時共有体制を整えた。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

本プログラムにおいては事業推進担当者個々の国際ネットワークを駆使して、国際共同研究を立ち上げ、海外調査を活発に行ってきた。そして、それらの活動には大学院生・若手研究者をメンバーとして主体的に参加させてきた。さらに、このようなアカデミック・ネットワークを維持継続し、かつ再生産していくために平成17年には連合王国・中国・韓国の11の研究機関と提携して「東アジア史研究コンソーシアム」を立ち上げ、活用してきた。これは、国際共同研究の母体として機能するだけでなく、教員・大学院生が相互に相手校を訪問し、教員は集中講義、大学院生は双方の大学院生によるワークショップを開いて、英語・研究対象地域言語による発表と討論を行わせるというものである。

このように「東アジア史研究コンソーシアム」をアカデミック・ハブとして機能させることにより、東アジア史研究における本学の国際競争力を確固たるものとし、加えて教育にも活用することで本学大学院生に英語・研究対象地域言語による発信の必要性を認識させモチベーションを飛躍的に高めた。

6) 国内外に向けた情報発信

プログラム独自のホームページを立ち上げ、

組織・目的や活動内容を発信し、事業推進の展開とともにホームページの更新を行った。また、調査研究の成果をニューズレター（1～10号）、和文紀要『東アジアと日本—交流と変容—』（1～4号）、英文紀要”Interaction and Transformations”（1～4号）を刊行した。さらに事業推進の進行とともに国内外の研究者を招聘してワークショップを開催し、国際ワークショップの成果については、『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ—』（すいれん舎、18年4月、386pp）、『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』（権歌書房、18年5月、250頁）、『九州大学21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」統括ワークショップ報告書』（19年2月、233頁）として刊行した。

「歴史学拠点コース」の設置は、学内的には、大学院教育上の部局間連携を達成したものと、評価を受けている。また、「東アジア史研究コンソーシアム」の設置と運営により、海外の研究者・大学院生との恒常的なアカデミック・ネットワークが形成された。これは海外の大学・研究機関からも高い評価を受けている。

7) 拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

設備備品経費、特に中間評価で指摘を受けたマイクロフィルム経費は、拠点形成の面から問題があったことを反省し、計画の見直し以降は、コンソーシアムの運営を中心として、教員・大学院生の相互訪問、ワークショップの開催、大学院生の調査研究・学会発表の支援等を通して、諸スキルの習得に努めさせ、研究教育に成果を上げ、拠点形成を達成した。

②今後の展望

拠点形成の一環として、平成19年4月から、比較社会文化学府・人文科学府の2部局にまたがる「歴史学拠点コース」を設置し、両学府の大学院生を共同で教育していく体制が整った。さらにそこをベースにして、「東アジア史研究コンソーシアム」「歴史学・歴史教育セミナー」を継続して運営していくことになった。従来の事業推進担当者以外の教員や講座を幅広い形で結集することが可能となったため、今後、「歴史学拠点コース」を核にして、研究・教育の一層の充実を図っていきたい。

③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	九 州 大 学	拠点番号	D 1 3			
拠点のプログラム名称	東アジアと日本：交流と変容—アイデンティティ形成の比較社会史的研究—					
1. 研究活動実績						
①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】						
・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕 ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの ※著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻（号）、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入 波下線（<u> </u>）：拠点からコピーが提出されている論文 下線（<u> </u>）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生						
今西祐一郎「稿本『古今和歌集遠鏡』について」『文献探究』43、66-90頁、2005						
今西祐一郎「「おなじぬれ」・「いときなき手」補考—『蜻蛉日記』の本文批判」『語文研究』100-101、27-37頁、2006						
川本芳昭「倭国における対外交渉の変遷について—中華意識の形成と大宰府の成立との関連から見た」『史淵』143、27-64頁、2006						
川本芳昭「漢唐時期以中国為中心的“交流与変遷”」（漢唐時期の中国を中心とした“交流と変容”）『復旦史学集刊』1、30-46頁、2005						
川本芳昭「中国を中心とした漢唐間における交流と変容について」『東アジアと日本：交流と変容』2、75-86頁、2005						
KAWAMOTO Yoshiaki, “The Formation of New Zhonghua Thought,” <i>Interaction and Transformation</i> 1, pp.147- 166, 2003						
川本芳昭『中華の崩壊と拡大—魏晉南北朝』講談社、1-382頁、2005						
TANAKA Yoshiyuki, MIZOGUCHI Koji, IWANAGA Shozo, HIGHAM, Thomas, “A preliminary report on the AMS Dating of Human and Animal Skeletal Remains of Yayoi Period Northern Kyushu, Japan,” <i>Interaction and Transformations</i> .3, pp.39-46, 2005						
FUNAHASHI Kyoko and TANAKA Yoshiyuki, “Methods of Tooth Extraction in Prehistoric Japan and Korea : a comparative study”, <i>Interaction and Transformations</i> 2, pp.63-98, 2004						
田中良之「考古学からみた古代家族」『社会集団と政治組織 列島の古代史』岩波書店、273-284頁、2005						
TANAKA Yoshiyuki, “Kinship in the Three Kingdoms Period of Korea: especially in Gaya region,” <i>Interaction and Transformations</i> 1, pp.1- 27, 2003						
田中良之「国家形成下の倭人たち」田中良之・川本芳昭（編）『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ』すいれん舎、15-30頁、2006						
服部英雄「博多の海の暗黙知・唐房の消長と在日宋人のアイデンティティ」『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』権歌書房、171-197頁、2006						
服部英雄「日宋貿易の実態—諸国来着の「蕃客」たちとチャイナタウン唐房」『東アジアと日本：交流と変容』2、233-264頁、2005						
HATTORI Hideo, “Chinese Merchants and Chinese Settlements in Medieval Japan: Starting with Place Name Toubou and Ima Toubou”, <i>Interaction and Transformations</i> 2, pp.99-116, 2004						
HATTORI Hideo, “Rice cultivation in Japanese agriculture in ancient times and the Middle Ages differed from other parts of Asia: Reexamining the meaning of kata-arashi and origins of the two-crop system”, <i>Interaction and Transformations</i> 1, pp.199-211, 2003						
服部英雄『歴史を読み解く・さまざまな史料と視角』青史出版、1-216頁、2003						
宮本一夫「中国における初期国家形成過程を定義づける」『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ』すいれん舎、247-274頁、2006						
宮本一夫「園耕・縄文農耕」（園耕と縄文農耕）『韓国新石器研究』10、51-68頁、2005						
MIYAMOTO Kazuo, “Changes in the Social Structure of the Neolithic Age in the Lower and Middle Yangtze valley”, <i>Interaction and Transformation</i> 2, pp.1-33, 2004						
MIYAMOTO Kazuo, “Formation of Center and Periphery in Ancient China: The Central Plains and the Great Wall Region”, <i>Interaction and Transformations</i> 1, pp.43-72, 2003						
MIYAMOTO Kazuo, “The Chronology of Eastern Han style Tombs in Thanhua District Trough the Olov Janse Collection(1938-1940)”, <i>Fishebones and Glittering Emblems</i> , Southeast Asian Archaeology, edited by Anna Karlstrom & Anna Kallen, pp.181-190, Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm, 2003						
MIZOGUCHI Koji, “Genealogy in the ground: observations of jar burials of the Yayoi period, northern Kyushu, Japan”. <i>Antiquity</i> 79-304, pp.316-326, 2005						
MIZOGUCHI Koji, “Time and genealogical consciousness in the mortuary practices of the Yayoi period, Japan”, <i>Journal of East Asian Archaeology</i> 3/3-4, pp.173-197, 2002						
MIZOGUCHI Koji, <i>Archaeology, Society and Identity in Modern Japan</i> , Cambridge, U.K.: Cambridge University Press, pp.1-183, 2006						
Miriam T. Stark, MIZOGUCHI Koji, et al, <i>Archaeology of Asia: Blackwell Studies in Global Archaeology</i> . Oxford, U.K.: Blackwell, Chapter 4 “Self-Identification in the Modern and Post-Modern World and Archaeological Research: A Case Study from Japan” (pp.55-73), 2005						
MIZOGUCHI Koji. <i>An Archaeological History of Japan, 30,000 B.C. to A.D. 700</i> . Philadelphia, U.S.A.: University of Pennsylvania Press, pp.1-274, 2002						
濱田耕策「“東夷”諸民族の王権形成—夫餘族系諸族と郡県統治との関係性の諸相」『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ』すいれん社、141-155頁、2006						

- 濱田耕策「百濟紀年考」『史淵』142、73-91頁、2005
- HAMADA Kosaku, "Sovereignty and Maritime Power: Chang Pogo's Ch'onghae Garrison and Pirates", *Interaction and Transformations* 1, pp.131-146, 2003
- 濱田耕策「渤海国の対唐外交—時期区分とその特質」『日本と渤海の古代史』山川出版社、46-74頁、2003
- 濱田耕策『新羅国史の研究』吉川弘文館、1-438頁、2002
- 中野等「いわゆる「海賊停止令」の意義について」、『東アジア海域における交流の諸相—海賊・漂流・密貿易』九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」・九州国立博物館設立準備室、77-89頁、2005
- 中野等「豊臣秀吉의大陸侵攻과朝鮮人陶工」（豊臣秀吉の大陸侵攻と朝鮮人陶工）한일문화교류기금・한일관계사학회編『한・일 도자문화의 교류양상』景仁文化社、47-75頁、2005
- NAKANO Hitoshi, "Concerning Toyotomi Hideyoshi's Signed Letter Dated June 3rd, 1593", *Interaction and Transformations* 1, pp.273-283, 2003
- 中野等『秀吉の軍令と大陸侵攻』吉川弘文館、1-389頁、2006
- 坂上康俊「日本列島は「東アジア」なのか」『東アジア古代国家論』すいれん舎、120-137頁、2006
- 坂上康俊「律令法と日本古代家族」（律令法と日本古代の家族）『東亜伝統家礼・教育與国法（一）』台湾大学出版中心、309-320頁、2005
- 坂上康俊「勅命下達文書の比較研究」『東アジアと日本：交流と変容』1、33-73頁、2004
- SAKAUE Yasutoshi, "How Did the Japanese Embassies Import the Legal Texts from Tang China?", *Interaction and Transformations* 1, pp.235-251, 2003
- 坂上康俊「敦煌発見唐律断簡（P. 3608, P. 3252）和《大宝律》」（敦煌で発見された唐律断簡（P. 3608, P. 3252）と『大宝律』）『中国法制史考証 丙編2巻』中国社会科学出版社、377-389頁、2003
- 佐伯弘次・水野哲雄・三村講介・荒木和憲・岡松仁・岩成俊策・大塚俊司・松尾弘毅・八木直樹「『海東諸国紀』日本人通交者の個別的検討」『東アジアと日本：交流と変容』3、47-68頁、2006
- 佐伯弘次「十五世紀以降の博多貿易商人の動向」『東アジアと日本：交流と変容』2、65-79頁、2005
- SAEKI Koji, "The Hakata Marchant Sokin and Relations with East Asia in the Muromachi Period", *Interaction and Transformations* 1, pp.1-15, 2003
- SAEKI Koji, "Trade between Japan and Sung China and the Hakata Goshu," 『国際東方学会議紀要』48、pp.39-50、2003
- 佐伯弘次『日本の中世9 モンゴル襲来への衝撃』中央公論新社、1-270頁、2003
- 清水宏祐「カイセリにおける商業空間の変容」『史淵』144、109-141頁、2007
- 清水宏祐「旅を支える施設と人（アナトリアの例）」『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』権歌書房、51-64頁、2005
- 清水宏祐「人の移動・アイデンティティ・ネットワーク」『東アジアと日本：交流と変容—統括ワークショップ報告書』九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」、31-41頁、2007
- 森川哲雄「チンギス・ハーン家の系譜と『蒙古源流』」『蒙元史暨民族史論集—紀念翁独健先生誕辰一百周年』367-392頁、2006
- 森川哲雄「モンゴル人の中国（中華）に対する意識の変遷（明～清）」『東アジアと日本：交流と変容—統括ワークショップ報告書』九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」183-193頁、2007
- MORIKAWA Tetsuo, "Study of Mongolian Chronicles from the 17th century to the early 18th century: Especially through the relationship between Erdeni-yin tobci and Sira tuyuji," *Interaction and Transformations* 1, pp.109-130, 2003
- 森川哲雄「乾隆期におけるキャプタ貿易停止と大黃問題」『東アジアと日本：交流と変容』1、53-73頁、2004
- 森川哲雄・佐伯弘次『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』権歌書房、1-250頁、2006
- 迫野 虔徳「指示詞におけるコソアド体系の整備」『語文研究』94、1-12頁、2002
- 吉田昌彦「近世「寺法」に関する一考察」『九州文化史研究所紀要』46、53-77頁、2002
- 吉田昌彦「久留米藩「浪人」制度と「国恩」の論理（下）」『比較社会文化』10、69-73頁、2004
- 吉田昌彦「前近代における日本人の『エトニ』の形成」『東アジアと日本：交流と変容』2、97-112頁、2005
- 有馬学・中野等・松原孝俊「スタンフォード大学フーバー研究所所蔵日本関係史料目録」『東アジアと日本』2、81-150頁、2005
- 有馬学「戦時期日本にも、「向き合う過去」はあった」『中央公論』118-2、89-91頁、2003
- 船田善之「モンゴル時代における民族接触とアイデンティティの諸相」『東アジアと日本：交流と変容—統括ワークショップ報告書』九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」、19-29頁、2007
- 祖生利・船田善之「元代白話碑文の体例初探」『中国史研究』2006-3、117-135頁、2006
- 船田善之「西安清真寺洪武25年聖旨碑」からみた元明期中国ムスリムの変容とネットワーク」森川哲雄・佐伯弘次編『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』権歌書房、65-78頁、2006
- 船田善之「元代の命令文書の開読使臣について—その人的構成と巡歴ルートを中心に」『東方学』111、89-106頁、2006
- FUNADA Yoshiyuki, "The Scenes of Business Transaction in the Yuan Period Seen in the Old Edition of the *Laoqida* (Nogeoldae)," *Interaction and Transformations* 3, pp.1-19, 2005
- 四日市康博「元朝南海交易経営考—文書と銭貨の流れから」『九州大学東洋史論集』34、182-203頁、2006
- YOKKAICHI Yasuhiro, "Three Bureaucratic Systems and Supervision of International Trade under the Yuan Dynasty," *Interaction and Transformations* 3, pp.21-38, 2005
- 四日市康博「元朝とイル＝ハン朝の外交・通商関係における国際貿易商人」『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』福岡：九州大学21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」、79-91頁、2006
- YOKKAICHI Yasuhiro, "Az Siraf be Kish: tejārat-e Oqiyānūs-e Hend va Kish dar 'asr-e Moghūl. (「シーラーフからキーシュへ：モンゴル時代のキーシュとインド洋交易」)" *Proceedings of the International Congress of Siraf Port*. Bushehr: Bonyad-e Iranshenasi, pp.125-136, 2005
- 四日市康博「元代集宁路古城遗址与“陶瓷之路”——研究展望以及今后的课题」『中国古陶瓷研究第十一輯』紫禁城出版社、94-100頁、2005

②国際会議等の開催状況【公表】

（事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数（うち外国人参加者数）、主な招待講演者（3名程度））

2004年1月31日～2月1日、アクロス福岡国際会議場

国際シンポジウム「東アジアの基層」

参加者人数（うち外国人参加者数）：200(8)

金宰賢(韓国・東亜大学校)、John Collis(イギリス・シェフィールド大学)、Y.Vostretsov(ロシア科学アカデミー極東支部)

2004年9月11日～12日、福岡国際会議場

国際シンポジウム「東アジアにおける交流と変容」

参加者人数（うち外国人参加者数）：150(6)

韓昇(復旦大学)、牟發松(華東師範大学)、姜友邦(梨花女子大学)

2004年11月13日、九州大学付属図書館視聴覚ホール

国際シンポジウム「東アジアの中の白楽天」

参加者人数（うち外国人参加者数）：120(6)

陳明姿(台湾大学)、雋雪艷(清華大学)、金卿東(成均館大学校)

2004年12月11日、九州大学箱崎文系キャンパス法文系講義棟101教室

シンポジウム「環シナ海世界と古琉球」

参加者人数（うち外国人参加者数）：200(5)

河宇鳳(全北大学校)、真栄平房昭(神戸女学院大学)、池田榮史(琉球大学)

2005年5月26日、九州大学六本松キャンパス大学院棟

A Kyushu University - London University (SOAS) Joint workshop on Japanese archaeology.

参加者人数（外国人参加者数）：15(3)

Jane Oksbjerg (School of Oriental and African Studies, University of London)、Simon Kaner (Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures)、

2005年5月27日、九州大学六本松キャンパス本館第1会議室

ワークショップ「弥生時代AMS年代をめぐる諸問題」

参加者人数（うち外国人参加者数）：30(3)

Simon Kaner (Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures)、Smith井川(マギル大学)、武末純一(福岡大学)

2005年6月27日～30日、九州大学中央図書館視聴覚ホール・文学部会議室

国際ワークショップ「古代国家とアイデンティティ：東アジアモデルの可能性」

参加者人数（うち外国人参加者数）：74(8)

李盛周(江陵大学)、許宏(中国社会科学院)、張学鋒(南京大学)

2005年8月8日～10日、九州大学中央図書館視聴覚ホール

国際ワークショップ「東アジア史研究コンソーシアム発足ワークショップ」

参加者人数（うち外国人参加者数）：80(17)

Simon Kaner (Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures)、趙化成(北京大学)、河宇鳳(全北大学校)

2005年9月23日～25日、九州大学箱崎文系キャンパス21世紀交流プラザ講義室

国際ワークショップ「内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム」

参加者人数（うち外国人参加者数）：70(8)

劉迎勝(南京大学)、韓文鍾(全北大学校)、陳尚勝(山東大学)

2005年12月3日、全北大学校進修堂

国際学術大会「東ASIA 3國の文化交流—歴史と展望—」（東アジア三ヶ国の文化交流—歴史と展望—）

参加者人数（うち外国人参加者数）：86(78)

王曉(蘇州大学)、崔英(全北大学校)、高福民(蘇州市文广局)

2006年7月15日～17日、九州大学中央図書館視聴覚ホール・文学部会議室

国際ワークショップ「古代東アジアにおけるアイデンティティの形成と展開」

参加者人数（うち外国人参加者数）：43(6)

韓昇(復旦大学)、李基東(東国大学)、朴漢濟(ソウル大学校)

2006年9月20日～21日、九州大学文学部会議室

国際ワークショップ「新たな東アジア像を求めて—九州と海域世界—」

参加者人数（うち外国人参加者数）：31(6)

陳尚勝(山東大学)、Kenneth Robinson(国際基督教大学)、李薫(韓国国史編纂委員会)

2006年11月7日～9日、九州大学文学部会議室

統括ワークショップ「東アジアと日本：交流と変容」

参加者人数（うち外国人参加者数）：53(4)

岩井茂樹(京都大学)、李成市(早稲田大学)、白石典之(新潟大学)

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

まず、恒常的な教育活動として、領域横断ゼミを開催し、事業推進担当者・協力教員が共同で連携しつつ、大学院生・若手研究者に対する研究指導を行った。第1サブテーマ「東アジア諸国家とその形成過程の比較研究」と第2サブテーマ「内陸圏・海域圏交流ネットワーク」領域横断ゼミの二つのサブテーマごとに開催し、平成17年1月から平成18年10月にわたり、それぞれ14回・13回開催した。若手研究者の報告はのべ42本に及ぶ。考古学・日本史学・東洋史学・朝鮮史学・イスラム文明史学の各領域の枠を越えて研究報告・研究指導を行う点に特色があり、若手研究者が幅広い視野を獲得し、自己の研究の相対的に位置づけることを可能とした。

また、研究報告・研究指導を行う領域横断ゼミとは別に演習形式の領域ゼミ・領域横断ゼミを実施した。これは、専門を異にする複数の教員が共同で、文献・史料講読を進める趣旨のものである。複数の教員がリレー式で授業を行うのではなく、一堂に会して演習を行うことに大きな特色がある。

大学院生・若手研究者への支援とその育成としては、平成15・16年度においては、大学院生をRAとして採用し（のべ18名）、かれらの支援を行うとともに、リサーチ・スキルの涵養を目指した。

さらに、平成16年度からの3年間ににおいては、公募により学術(COE)研究員をのべ8名採用した。学術(COE)研究員は、本事業の研究を各自推進するとともに、本事業の企画・運営に携わった。これによって学術(COE)研究員が、研究・国際ワークショップの企画・遂行のノウハウを習得するに至った。

また、平成14年度からの3年間、本事業に基づく海外調査・学術交流によって培ってきたアカデミック・ネットワークをより堅固に機能させるべく、平成17年度に本プログラムが中核となって、連合王国・中国・韓国の研究機関と提携して「東アジア史研究コンソーシアム」を組織し、教育・研究を連携して推進する体制を整えた。コンソーシアム・メンバー機関は、当初、セインズベリー日本芸術文化研究所・華東師範大学・山東大学・南京大学・復旦大学・北京大学・全北大学校・東亜大学校の8機関であったが、その後、韓国学中央研究院東北亜古代史研究所・中国社会科学院歴史研究所・釜山大学校とも提携し、最終的には11機関となった。

平成17年8月、平成18年9月には、メンバー機関から教員・大学院生1名ずつを本プログラムに招聘し、国際シンポジウム・集中講義・院生ゼミを開催した。また、本プログラムからも教員・大学院生をメンバー機関に派遣し、集中講義・院生ゼミ・ワークショップを開催した。海外研究機関の教員のみならず大学院生も相互訪問を行い、双方の大学院生教育に相乗効果をもたらす点に大きな特色がある。教員・大学院生の相互訪問は、2年間でのべ60回に達し、本学大学院生の英語・研究対象地域言語による発表・報告はのべ29件を数える。派遣大学院生については、派遣先メンバー機関の教員・研究状況を斟酌した上で、事業推進担当者会議で選抜を行った。

「東アジア史研究コンソーシアム」のメンバー機関を始めとする関連研究機関との国際共同研究・海外調査に際しても、関連する大学院生・若手研究者を帯同することにより、フィールド調査を含むリサーチ・スキルの向上を目指した。

以上により、本プログラムにおける教育目標、すなわち、国内・海外でのフィールド調査や資料調査をおこなうリサーチ・スキルを有し、海外での共同調査・研究を遂行、国際学会での報告を行うコミュニケーション・スキル、プレゼンテーション・スキルの習得を前提として、東アジアをはじめとする現代諸地域の文化的基盤を理解し、今日のアジア社会に必要な社会貢献力を持つ「アジア専門人」の養成は、次のように達成された。まず、この5年間で、大学院生による国外調査のべ99件204名を実施した。また、部局をまたいだ領域横断ゼミや論文指導の実施によって大学院生・若手研究者は個々のスキルを習得してきた。さらに「東アジア史研究コンソーシアム」において、29名が英語・研究対象地域言語によるプレゼンテーションをおこない、個々のアカデミック・ネットワークも構築してきた。国外でおこなわれた国際学会での英語・研究対象地域言語によるプレゼンテーションもプログラム開始前5年間5件からプログラム開始以降50件と激増し、論文数も同じく98本（うち外国語14本）から183本（うち外国語19本）と増加した。また、大学院生・若手研究者から25名が博士の学位を取得した。

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は概ね達成され、期待どおりの成果があった

(コメント)

研究教育拠点形成計画全体について、中間評価に基づき修正再編した計画に沿って、概ね成果をあげたと評価できる。

人材育成面では、中間評価以降、学術（COE）研究員への予算措置を増加し、育成環境を大幅に改善したことについて、妥当であると評価できる。

研究活動面では、中間評価後の修正計画案「①東アジア諸国家の形成過程、②東アジアにおける内陸国と海域国交流ネットワークとイスラムという2視点からの比較社会史研究」がこの2年間に於いて推進されてきた。①の場合、東アジアでは国家形成の仕方が酷似しているため、中国の国家モデルが朝鮮半島や日本にも広がっていくことを踏んで、東アジアモデルを設定したのであろう。漢字・仏教・律令・漢訳仏典等の文化を背景とする律令制度がその具体像である。また、②の場合、東アジアにイスラムという視点を導入したのは斬新であった。ヨーロッパとの交流以前におけるイスラムによる文化交流の重要性を認識し、近年の世界的水準を持つ日本のイスラム研究と、同じく世界的水準の中国史研究とを連結させようとする意図は評価できる。しかし、①は古代、②は中近世というように時代で分けてしまったので、両者の連携は未だ十分とは言えない。なお、拠点リーダーは「総括」的地位と同時に研究上の中心的役割分担を果たすべきであるが、「研究活動実績」欄を見ても、その役割が分かり難い。また、国際会議は十分に行われたが、その成果発信が先方（たとえばセインズベリー日本芸術文化研究所等）にどのように評価されているのかどうかを明確に示すべきである。

補助事業終了後の持続的展開については、中間評価以降、補助金の大幅カットの後、学内経費の補充によって人材育成の経費を増加しつつ維持したことや、若手研究者を含めたこれまでの個々の研究者の努力は評価できるので、貴学でしか成しえない世界的な東アジア研究教育拠点の大枠ができあがりつつある状況を踏まえ、今後もこれらの拠点形成の継続的な取り組みによる進展を期待したい。